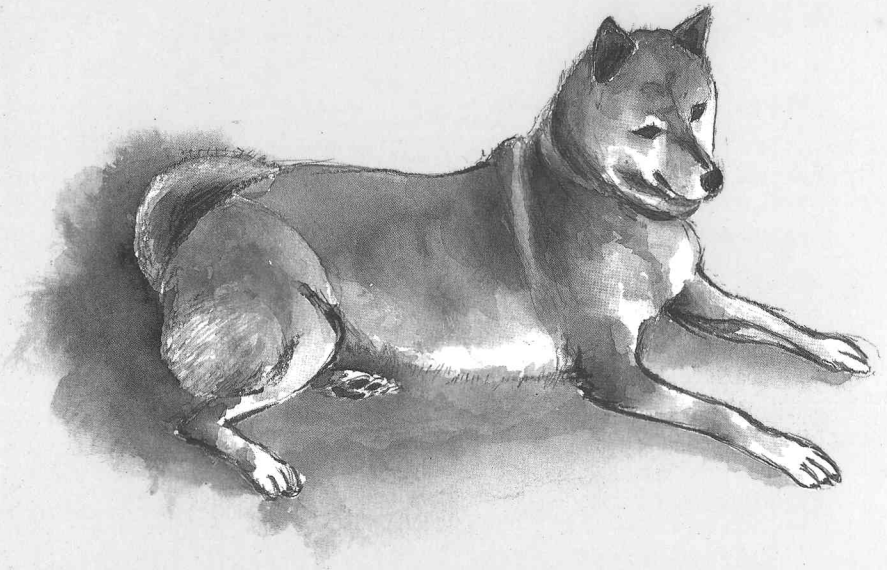


季刊 連句 第14号

昭和六十一年九月一日発行



季刊連句 第14号 目次

連句辞典の完成（南柏雜記12）	1
故人名は他か場か	東 明 雅 2
A C C 連句教室の再編成	5
俳諧の笑い話	武 藤 禎 夫 6
『連句辞典』編纂者の辞	8
①用語篇雑感	大 畑 健 治 8
②起情二つ	宮 脇 眞 彦 14
③連句研究の現状	長 島 弘 明 18
④用語遍歴	杉 内 徒 司 21
芭蕉口傳（蓮の糸 五尺の菖蒲 乞食袋）	13 (目当の柱) 17
絶頂の城 付勝練習歌仙	24
第18回猫蓑会 二十韻 六作品	26
瀧見翁	穴沢篤子 睡 蓮
島田和世	歩道橋
杉戸金一	
四十雀	高瀬美保 梅雨あがれ
中川哲	返り梅雨
原田千町	
鷗外居 二十韻	鈴 木 春山洞 28
連句会案内	29
雁帛往来	29

# 連句辞典の完成

## 南 柏 雑 記 12

雅

連句辞典はもう半歳は早く世に出るべきものだった。計画は綿密に立てたつもりなのだが世の中のことは何でも、思う通りには行かぬものである。六十年途中に出る筈のものが、つい延び延びとなる。原稿が揃わぬ。校正もひまがかかる。思いもよらぬ原稿が飛び入りする。四月から五月になると、流石に私どもの眼の色が変わった。それは他の人に対する面目というよりは、自分に対する意地だったようだ。

「五月二十二日二時、東京堂で杉内氏に逢い係りの菅原君に

- ① 「連句入門の手引き」念稿。
  - ② 「人名篇」再校。
  - ③ 「用語篇」「に」「わ」再校。
  - ④ 「参考文献」再校及び大畑氏「補遺」
- 以上をわたし、五時半すぎまで作業、お茶の水の「ニュートーカー」でビール、冷酒を飲み帰宅、八時半就寝。」と私の日記にある。いくら酔ったからと言って、八時半

就寝は異常である。このころ、余程疲れていたのだろう。毎日の晩酌も酒量が平常のほぼ二倍になった。疲労は肉體ばかりではなかったのである。

私は辞書を作ったのは始めてである。だから、その作り方を知らなかったのが、一番悩んだもとである。今から考えてみれば、反省すべき点が多い。考えてみると、最初から、もすこし、読者として対象になる人を限定すべきであった。まるで連句の何たるかを知らぬ人から、大学の専門家までを包含する辞書とは、どんなものであるべきか。それで「近代連句入門の手引き」などが大部分を占めることになったが、もし「俳句辞典」なら蛇足であるものが、連句には必要であった。これが連句の運命であり、現在おかれている立場である。このあたりにも私たちの苦心はあった。その外、初めての試みだけに、分らぬことが多すぎた。しかし、これも貴重な体験をさせていただいたと思えば氣は楽だ。

それだけに六月二十六日午後三時、東京堂で杉内氏と逢って、出来たての湯気のたっているような「連句辞典」を手にした時の感激は一入であった。小じんまりとまとまって、装釘も悪くない。内容は御批判をいただく外はないが、一つだけ、自慢させていただと、巻末に初心者用の「歌仙季題配置表」とならべて、○まろちん庵雪也編の「蕉風俳諧変化表」を付けたことである。これを利用して、現代連句も早く中級・上級の連句に進みたいものである。

# 故人名は他か場か

東 明 雅

- (1) 逆髪（逆髪）の祭りも見ずに終はりたり 自  
(2) 彼との愛用煙草キャスター 自他半  
(3) 岳樺福永武彦輕井沢 □  
(4) 野良猫いつか戸袋に棲み 場  
(5) 河豚汁の昨日の過ぎて医者通ひ 自  
(6) 右の一連は六十一年五月十八日、柏の連句会で捌かれたものである。ここに福永武彦という人名が現われる。小説家福永武彦を知らぬ人はまずないとしても、彼はまだ生存していると思つてゐる人はすくなくあるまい。だが、正確には昭和五十四年に既に故人となつておられるのである。このような場合、この人名をどう取り扱ふか、この問題について私は私も疑問があるまま、はっきりした意見を述べていなかった。そこで、その場に居合せた方々から、次のような疑問が出された。その疑問を整理すると次のようになる。

(1) その人物が実存（生存中）の人物なら当然他とすべきか。

- (2) その人物が故人の場合はこれを場とすべきか。  
(3) 故人でも比較的最近に亡られた時はこれを他と取つてもよいか。あるいはあくまで場とするべきか。  
(4) 歴史的人物を詠んだ時、これはあくまで場であつて他としてはならないか。  
(5) 右のことはその句その場の雰囲気によつて臨機応変に処すべきものなのか。  
右のような場合、やはり第一に参考になるのは芭蕉の作品であるが、  
(1)の場合、その人が実存（生存中）の人と見られるには、次のような例がある。
- a 金鏢（金鏢）と人によぶる身のやすさ 自  
b 内蔵頭（内蔵頭）かと呼声は誰 自他半  
c 坊主になれどやはり仁平次 他  
(2)の場合  
a しばし宗祇の名を付し水 場  
b 日東の李白が坊に月を見て 自他半  
（『冬の日』）  
（『冬の日』）

c 桃花を手折る貞徳の富  
d 襟に高尾の片袖を解く

(『冬の日』) 他  
(『冬の日』)(自他半)

(1)にも場となる可能性は理論的に存在するが実例は見出せなかつた。

(1)と(2)とに差がないのであるから、(3)と(4)も当然、その句の作り方次第で、自・他・自他半あるいは場と、いづれにでもなるのである。しかし、それは(5)にあるように、「その句、その場の雰囲気によって臨機応変に処すべきもの」と言うよりは、句作の狙い、ことに前句との関連によって、はっきり判別できるところであろう。

たとえば、この問題の句、「岳樺福永武彦軽井沢」の句にしても、前句が「彼との愛用煙草キャスター」と言う、何かバタくさい瀟洒な煙草を頷ちのむ生活であるから、その余情付として、福永武彦を出したものであつたとすれば、この句は人情他と解し、岳樺のある軽井沢の別荘における福永武彦の生活を描いたものとなる。また、作者が前句の生活から直ちに軽井沢を連想し、さらにその軽井沢の縁で

岳樺や、故人となつた福永武彦の名を添えただけのものならば、場の句といふべきであろう。それは福永武彦の名は出ているけれども、(2)の a「しばし宗祇の名を付けし水」ほどにも具体性が見られないから、場の句と見てよいであろう。それにしても、この一連を見ると、(イ)自、(ロ)自他半、(ハ)が場、(ニ)が自であるから、(イ)は場でも、他でもよく、私としては、つい最近になつた福永武彦の場合などむしろ他の句と取りたいところである。

さらに、これには次のような問題が残っている。(6)故人である有名人が何かをしている様をそのまま想像して詠むことは、『あり得ぬ事は付かぬ』という部類に入るのか、どうか。あるいは過去に於てあり得たであろう事であつたら、これを是とすべきか。

『あり得る事は付く、あり得ぬ事は付かぬ』と言うのは、私の師匠根津芦丈先生の教えで、私も度々、この言葉を口にした。その真意は、昔の季寄せや歳時記には出ていても、現代の社会には存在しない、また通用しないものが幾らで

東 明雅 著

## 連句入門

中公新書 508号  
価 五〇〇円

## 芭蕉の恋句

岩波新書 91号  
価 三二〇円

## 猫 蓑

永田書房  
価 二三〇〇円

## 好色五人女 好色一代女

小学館  
価 一九〇〇円

もある。たとえば「砧」などは、秋の季語であるが、砧と言えば、女性が洗濯した衣をたたきながら、遠くにある夫や恋人のことを思う情愛の深い語として、中国の詩にも多く詠まれ、日本の和歌や俳諧にも取り入れられた。しかし、それは着物の繊維が堅かった昔の話で、洗った繊維を叩いてやわらかに着心地よくするために砧の必要があったのだが、現在の柔かな繊維で作られた着物では、そんな必要がないために、全く世間から姿を消している。その砧の音を現在いかにも実際に聞いたように作句する。そのようなことを芦丈先生は嫌って、そんなことをするのを禁じられたので、これは尤千萬なことである。しかし、人によると、これを拡大解釈して、空想上のものはすべて拒否するという頑な態度を取る人もないではないが、それは行きすぎたいうものであろう。

現に、(2)のcであげた芭蕉の「桃花を手折る貞徳の富」も彼の想像であろうし、dの「襟に高尾の片袖を解く」も豪奢な風俗をあらわすための想像であり、ともに現実のものであったとは考えられない。

芦丈先生の連句集『この一路』（昭和三十六年刊）を見ても、

ノ貫が翌行春を余所顔に

(他)

子供になって遊ぶ良寛

(他)

弟子もとらず明珍秋の炙に坐し

(他)

白隠がいまはの笑ひからからと

(他)

ひとり舌まく幻庵が棋譜

(自)

など、実在した故人の行状がさまざまに空想されて登場する。これらは『あり得ると思い、付け得る』と思われたからである。

しかし、芭蕉も芦丈先生も故人の名を出された作品はあるけれども、その数は決して多くない。また、芭蕉にあっては『冬の日』から『猿蓑』、そして『炭俵』と進むにつれて少くなってゆくようである。これは一つにはあまり有名な故人の名を出すことが軽みに進む作風にそぐわぬようになって来た為とも思われるが、さらに彼の創始した面影の付けの為とも思われる。

草庵に暫く居ては打やぶり

いのち嬉しき撰集の沙汰

(『猿蓑』)

の例を持ち出すまでもなく、はっきり西行なり西行と名を出すよりも、それらしい人物としておぼろげに出す方が、読者にも興味があり、第一、次の作者が付けやすいのである。これが蕪村などになると、はや忘れられたのか、人名がより多く出てくるのも俳諧の衰退の一步であろう。

結論として、故人の名を出し、現実の人のように活躍させることは自由である。決して蕉風ではそこまで人の空想を制限してはいない。しかし、せつかく面影付というものがあるから、これを活用するのも一つの有効な手法である。

## A・C・C 連句教室の再編成

A・C・Cが発足したのは昭和五十六年四月のことであった。その時の様子をありありと書いてるのが、季刊連句創刊号の歌川（鳥沢）和代さんの文章である。そこにも書いてあるように、先生も受講生も全く初めてであったから「真に初々しい先生と生徒たち」であった。しかし、これが二年たち、三年たち、今では六年目の後半になっている。そして最初からの方が七・八名残っておられ、それに、二期、三期から今度は十期生までが一教室で勉強して来た。先輩・後輩助け合って一座を楽しむのは大変愉快ではあるが、何としても五年の差は大きい。一期の方などには私よりもむしろ知識・感覚ともにすぐれた方があり、私は大いに力にし、うれしいことではあるが、山村僻地の分教場みたい、高い水準のお話をすれば、新米の方には分ならず、新米の方を立てれば、古参の方には当然繰り返しとなり、いかにこの矛盾を解決するか、私も真剣に悩んで来たのであるが、もうそろそろ限界であろう。まさか中学の三年生と小学の一年生を一緒に分教場もあるまいではないか。

それで、この十月からはクラスを二つに分け、いわば研究科と入門科に分けて教えることにした。教える時間が増えるのは苦しいけれども、どちらに気兼ねもしないで、のびのびと教えられたら、気持もさっぱりするだろうと思う。

まず、入門科は在来のやり方でやるつもりである。入って来た人をいきなり一座に引き入れ、まるで水泳のできない人をプールに投げこむように、アップアップの経験をさせた後に、おもむろに「連句入門」を教科書に、付け、転じから教えこめばわかりも早いだろう。

研究科は一応、実作は卒業されたのであるが、また興味のある方には俳諧の理論、古典・現代作品鑑賞を主にして、時々実作を交えて行けばまた楽しいのではあるまいか。

一応、七期以後の人を入門科、六期以前の方を研究科とするが、それは一応の規準であって、興味のある方はどちらに出られてもかまわない。

とに角、どのような結果になるか、分からないが十月以後はこのようにして頑張ってみるつもりである。

# 俳諧の笑い話

武藤 禎夫  
(共立女子大学教授)

新刊の岩波文庫『醒睡笑』は、江戸初期の笑話の集大成で、そこには中世末に流行した連歌や俳諧に関する話柄もかなり見られる。宗祇とか紹巴など有名な逸話も多少まじるが、本の性格上、やはり誇張された笑いや、おかしさを強調した失敗咄が中心になっている。願ってもない良師に恵まれながら、いたって不熱心で、いつまでも未熟な句作と無知を繰返している私には、同志的な親しみと気安さを覚えるので、その二、三を紹介してみる。

○老母、老父と成人の男子、三人一所にあり。さらでだにいぶせきはいりの小屋、春雨すさぶ永日なれば、暮しかねつるつれづれに、老父むす子に向ひ、「俳諧をして遊ばんものを」といふに、男子「もっとも」と同じ、発句をする。

ててじゃ者ははじゃが者にうち迷ひ

老父「さらば付けん」と、

それにつけてぞおのれできける

狭い陋屋に往む貧乏世帯ながら、親子して俳諧を楽しむ心のゆとりは羨ましく、その団欒ぶりは、馬場彬風氏の「家庭連句」に通ずるものがある。艶色味の濃い付合も率直、庶民的で笑いを誘うものがある。

○田舎のかせ侍、長陣の慰みに、「俳諧をして遊ばん」といひつつ、

人はらんぼうをしてさへ送る世に

とあれば、「さらば付け申さん」とて、

われらは野兵糧だにもなし

田舎の無学な下級武士たちも、滞陣の退屈しのぎに我流で俳諧に遊んでいる。ただ、生かじりの悲しき、乱妨(掠奪)とか野兵糧などと物騒な軍中用語を持ち出したり、「乱」の字を切れ字「らん」のつもりで使ったり、「人はらん・ぼうをしてさへ」「われらはのひやう・糧だにもなし」と、句割れ・句跨りも何のその、弁慶がな、がきな、ぎなた式に詠んだ滑稽である。しばしば第三の胴切れの注意を受ける私には、手放しでこの田舎侍を笑えない。

元朝早々、火をおこす小僧が吹く火吹竹で灰まぶれになった和尚が、「祝うて俳諧の発句をせん」と、

小僧めがふくとくわれにふきかけて

福德を吹きかけたと縁起直しに詠むと、すかさず、

坊主を見れば灰にこそなれ

灰Ⅱ火葬になったと皮肉な付句をする、落語「かつぎや」につながる和尚と小僧話もある。このように、社会の



低い階層でも、俳諧流行に乗って気軽に楽しんで来た。

しかし、正式に宗匠につき、式目を知り、付合を習うに越したことはない。俳諧の極意、一句の仕立ての工夫について、「心を深う、物あはれに、花奢風流に付くやうに」と教えられた初心者が、教え通り忠実に、

首ぎはや二季の彼岸に茶香杵

と詠む。宗匠から句の意味を聞かれ、「首際まで水とは、深う詠んだもの、物あはれに二季の彼岸を出し、花奢風流には茶道香道、付くためには何よりも餅をつく杵だから」とと答える。句が付くと餅を搗くを掛けた洒落だが、かの有名な宗長でも、丹波の杵の宮に詣った時、「つくやうに守らせ給へ杵の宮米こそ持たね連歌なりとも」と詠んでいるくらいだから、これからは杵のお守り持参で句座に出ようかと思っている。

付く付かぬといえは、他人の句を見るたびに、「あなおもしろき取合せや。さすがふるぐすねや」と感心する体の宗匠がいた。弟子から「ふるぐすね」の意味を問われ、「古ぐすねはつかぬ物なるまま、付かぬ句あるを、われは申して候よ」と説明した話もある。松脂を油で煮て練りまぜた薬練は粘着力があるが、古くなっては効きめも薄れて付かなくなる。端的に「付かず」と斥けず、婉曲に「ふるぐすね」の隠し言葉で対応していた宗匠の心遣いはありがたいが、訳が分かれば、ごめん蒙りたい言葉である。

このような手合いは、指合・去嫌についてもまた、平気で失敗を重ねている。

○一句出したるに、執筆「舟が近い、近い」といひけるを、とくと思案して、

舟でなし中くりあげた木にのりて

七句去りといわれる舟を、「中くりあげた木」とは言い得て妙である。また、移従の連歌の席で、

春の日は軒端につきてまはるらん

という句を出し、宗匠は、日は火に通じて不吉だから「消せ」と命ずる。執筆が「数度の直しで、これ以上は消されぬ」というと、この作者「とにかく消しなさい。またすぐつけるから」と、付け火にも通ずる失言を犯している。

熱中するあまり、狂に凝り固まる御仁も登場する。

連歌に身をやつし、心をそめ、臥するにも起るにも、この事のみなりつる人の栖家なる軒の下に、夜小便する音しけり。かの亭主、とがめていへるやう、「夜分に居所へきたって水辺を下すは、人倫か生類か。植物をもつて打擲せよ」

「夜、うちの軒下で立小便の音がするが、人間か、犬かな。とにかく杖で叩きのめせ」では散文的すぎるが、この用語づくしは噴飯物。こうした主人に仕える下男は、日夜小耳に挟んでいるので、朋輩への愚痴話にも、「朝とくより供し、夜更くるまで詰むる辛勞、いやにはあれど、さりながらいま一季あざろうか知らぬ」と、契約期間を一年継続する重年Ⅱ居なりに、自分の句にまた自句を付ける求食の用語を使っている。『連句辞典』の「あざり場」の項を讀んでいて、ふと思ひ出した笑話である。

① 用語篇 雑感

大畑 健治

(職業訓練大学校)

連句専門の辞典が現れるのを渴望していた人たちは多勢いた。その理由はいうまでもなく、連句が復活してからそれほど時間が経過しておらず、同義・類義の用語が混乱して、それを正して整理する俳諧師の多くが他界してしまつたからである。現代人には格に入りて格を出る自由な連句精神の神髓が理解しにくくなつてゐるが、それ以前に、発想の基盤をなす用語をしっかりと理解しなければならぬのである。

事実、現代人の眼には儀式にしか過ぎないと映る正式俳諧興行にも、文字化されたいわゆる文芸としての連句を、行動的な実体験を通して裏から支えるものが秘められてゐる。それは、連句がパフォーマンスの文芸であることを象

徴する儀式である。上手な文字文芸さえ作られればよいというような現代文芸の風潮とは根本的に異なる。社会の営みと個人の自由を両立させようとするところに連句は成立する。現実を見据えて人間性を尊重する文芸は、現実性を捨象した文献資料から解明するには限界がある。代々の俳諧師たちはこれを口伝によつて伝えてきた。この口伝として伝えられてきた理由を十分理解してゐないと、現代文芸の如く千篇一律に扱いかねない。現代人が意味の筋だけ一句を解釈し得ても、僅かな表現のあやを読み取る能力がなければ、前句に対する付けの手法を誤解することも生じるのである。意味が同じでも、句の仕立て方により人情の機微は変化する。口伝とは、そうした個々の具体例に接す

ることに宗匠から弟子に示される。口伝の真意は秘することにあるのではない。生きた呼吸を伝えるためである。これは弟子の資質にもよる。それを部外者が、現代的な平凡な知識と同様に心得て、守秘主義などと口伝批判するのは盲評といえよう。現に口伝で学んだ者が、入門書や研究書を見て飽き足らなく思うのは、現代の合理主義による形式的論理で活字文に組まれると、生命を宿しているべき連句の生彩が失われるからである。恋する思いを口にすると、その思いが味気なくなってしまうのと同じである。用語も合理的に説明しようとする、意味内容に微妙な齟齬が生まれる。

注釈書類で、付句の手法を句付と説明した次の付句に会釈と説明し、さらに次の付句に観相などと説明しているようなものは論外として、用語が使用者独自の判断で定義付けられ、乱用されていたのでは、連句の将来は覚束ない。こうした現状からしても、辞典は必要となっている。しかし、その辞典も、表現上現代の論理的な文章によらざるを得ない。事項の説明はよいにしても、付けの心法には枷が加えられることになる。現時点における辞典は、取り敢えず用語の混乱を整理すること、現実的なパフォーマンス性を崩さないことに配慮して、吟味選定された項目とスタンダードな内容を備えたものが要求されているのではないかと思われる。

このたび東京堂出版から刊行した『連句辞典』は、そう

した連句界全体の動向を加味して編集された。辞典のスタイルはいろいろなものが考えられるが、読者に実作者・研究者・鑑賞者を想定した。特に、実作と研究の立場は不可分な関係に置かれており、蕉風連句を対象とする研究用語と実作用語が同一に扱われているのが現状である。そして、それぞれが辞典を必要としている。そこで、これら三者の要求に応えられる辞典が考えられた。しかし、限られた紙数と期限の中で、近世から現代までの連句を網羅することは到底不可能である。連句に少しでも関わる語を選んで採用すると、相当数に上る。中には用語のみが伝存し、意味内容不明の語もかなり存在する。それらは殆ど芭蕉から現代に至る時代の流れの中で発案生成され世に流布することなく忘却されていった語であろう。もちろん、これらの語を細大洩らさず収めた辞典も考えられるが、今回の企画はコンパクトタイプの辞典である。また、そのような辞典が出回ると、収拾のつかない状態を招きかねないのが実作界の現状である。現代の研究や創作に必要な用語を中心として篩にかけるに及くはない。その照準は、いうまでもなく蕉風連句に向けられる。蕉風といっても、芭蕉在世中から没後三〇〇年を迎える現代に至るまで、さまざまな史的様相を呈してきた。用語解説を執筆した五名もまた、蕉風の流れを汲む根津芦丈翁の教えを、直接的間接的に学んできた者である。しかし、辞典となると、師の教えをそのまま解説文にすることは許されない。公的な性質を無視してはならないのである。伝統的文芸である連句は、今でも文芸

性において、芭蕉の理論と作品が完全に他を圧倒している。そして、現代に至るまでの代々の俳諧師たちが範を芭蕉に求めてきたことも事実である。さらに、西欧文化から一步離れて独自の文芸性を保持してきた連句は、貴重な文化遺産であり、大切に扱われなければならない。そこで芦丈翁の教えを再度芭蕉の俳論と作品によって検証し、妥当な線に添って用語解説を施すことが最善であると考えた。

芦丈翁は諸国行脚され、各地の俳諧師と広く風交を求められ、俳諧精神を培われた人である。この芦丈翁の教えに狂いのないことは、芭蕉を検証することによって思い知らされた。それでもなお、本辞典の用語解説では芭蕉の俳論と作品を重視した。それは芦丈翁の教えを軽視したわけではない。蕉門の論書に触れられていない部分では、芭蕉作品で検証の上、大いに解説文に生かされている。しかし、芭蕉重視の主な理由は次による。

用語の解説に対し、典拠を詮索する読者が必ず現れる。そして、その都度是非が論じられ、実作界は実作以前の問題で大揺れに揺れる。実作に通じた作者ならば、典拠などにこだわらず、実作に有益であるか否かを見抜き、是非は是非として済ませるところであるが、そこまで到っていないのが現状である。実際、正式俳諧興行は芭蕉の時代には存在しなかったなどという妄説が飛び交い、その渦中に置かれたこともある。このようなことは再三再四に及んだ。このため辞典編集に際し、一つ位は典拠を示しておきたいという願いがあった。解説中に芭蕉およびその一門の

俳論や作品を踏まえ、参考班担当の人たちの手を煩わせたのも、このような理由によるとともに、辞典としての妥当性と公平性を示し、読者が直接原典に接して再検証しやすいようにするための配慮である。

また、用語篇の見出し項目と解説は、すべてが芭蕉関係の文献資料によったわけではない。正式俳諧興行に関する一連の用語は、芦丈門に伝えられる作法によって補った。これは、芭蕉在世中の資料によって一部確認されるもの、芭蕉の執行した作法の詳細が文献に残されていない理由による。これらは恐らく二見瀉の文台のように、口伝として伝えられたものであろう。しかるに芦丈門では、「俳席の掟」など芭蕉のそれを伝えている。もちろん美濃派にもそれなりの方式が伝えられているが、全体的な統一性を考えて、とりあえず芦丈門に伝わる作法を民俗学的資料として採用することにした。「懐紙」の項で藤の花書きに触れているのも、かかる執筆基準による。また、芭蕉以降の資料においても、有益と思われるものや現代に市民権を得ているものは、見出し項目や解説に採用した。「べた付」「不即不離」などはその例である。「三つ物」の作法にしても、芦丈門に伝えられていて芭蕉の作品例に見当らぬ作法を蕪村の作品によって例証した。さらに、「俳席の掟」などは研究的立場からすれば「掟」である。この「掟」の不明確性を補うため、修飾語「俳席の」を補った。「植物」の読みなども右に準じて決定したものである。

項目の立て方について、杉内氏より「読める辞典」にな

るとよいのではないか、との提案がなされた。確かに魅力がある。しかし、細部まで検討して困った。七名と八体と人情の自他などを含めて解説を施さなければならぬような場合も想定され、この方式では幾通りもの具体例を示す単行本になってしまふ。また時には、用語だけ用いられて、用語の解説が脱落する危険性もある。同一用語が目まぐるしく瀬出する恐れもある。かくて谷地氏より、作品鑑賞篇を別に設け、用語の実際的な用例と併読して読者に理解を深めていただく、という方法が示された。これが大項目によらず、小項目を立てるに至った経緯である。それでも「七名八体」の項目に対して「有心付」「会釈」「其人」などの別立て細項目を見出しに設けながら、「四道」の添・随・放・逆などは一項目に纏めて解説した。「脇五体」も同様である。その理由は、蕉風連句を中心にして考えるとき、「四道」は蕉風以前の発想方法、「脇五体」はそれに準じた発想方法に依存しており、付句を案じるときの前句の取り扱い方からすると、「七名八体」で十分に対応できる。「四道」や「脇五体」にまで別立ての細項目を立てると、「七名八体」と混同し、再び術学的な用語の解釈がなされるに違いない。現に阿部正美氏も、用語の混乱に苦勞されたという。この辺り、臨機応変に処理したことを了解された。

次に、編集上最終校でいくつかの見落としがあった。本書が連句辞典の嚆矢であるという気負いもあって、最初に慎重であり過ぎた余り、作業の進行は序破急ならぬ序破急

急であった。前述の如く、本書には紙数と期限が限られていた。東先生が、「期限が遅れて不義理をしては申訳ない」とつねづね申されるお心遣いは、編集委員一同に切実に伝わってくる。量のある原稿は削除の手を加えなければ取まらない。しかも校正刷はこま切りに次から次へと送られてくる。その間にも少しでもよい辞典にしようと推敲の手が加えられ、ときには項目ごとの削除・追加もあった。こうした中で、↓印で示した参照項目の存在しないものも現れた。一部に纏って校正不十分なところも生じた。一―五頁下段八〇九行目は、「作中人物としての寺の傭人であつて、寺の傭人に作者は視線を向けて」とあるべきところ。一―五頁上段八〇九行目は、「これもまた、右の勢いからすると走りで見られるかもしれない」とあるべきところ。一―七頁上段二行目の「花の句」は「花」とあるべきところ。いずれも注意深く読めば気付くところである。

期限の問題は単なる約束のみならず、辞典の刊行を心待ちにしている人々への面目でもある。私自身この点に関しては、一日も早く上梓すべきであるという考えに立っていたのである。

最後に、現代人には理解しにくい連句の発想法について触れておきたい。

連句には、現代の合理主義的な分類方法とは違った分類方法が用いられている。俳諧師たちの体系は生命を核とし、生活的な感覚で感じ取ったままに対象を分類整理する方法

に立脚している。その顯著な例として、「食物」の項を見ると、動物や植物でも調理に付されたものは食物として扱われる。これは、既に動物や植物としての本質的な生命を失っているからである。根付きの植物と根無し植物という考えも、そこから生じてくる。「葉」がこうした生命の衰えから派生し、「無常」が釈教とは別に扱われるのも、追悼と追善が別に扱われるのも、死に思いを至らしめた死と己れとの関わりがそこにあるからに他ならない。また、「食物」のように、人工の手が加わっているかどうかも一つの分類基準である。自然の山と人工の築山、木と木材を加工した器物などはそれである。付所としての八体などは、現代合理主義からすれば、時間・空間（天候）・人物（物故者）・時事・觀念（架空人物）として分類したいところである。しかし、これでは「旅体」「居所」「植物」「聳物」などの素材を示す言葉と同じようなものになってしまふ。八体という「其場」「其人」の「其」が、前句に対して思い遣る付所を示していることに注意しなければならぬ。「時節」は前句の其の時節であり、「天相」は前句の其の天相に着目して付句を案じよ、ということに他ならぬ。発案者の支考は用語の語呂のよさを重んじて、「其」という付所を示す語を以下の用語から省略したのであろう。これは逆に考えると、伝統的な用語を尊重した処置であり、史的研究の立場からすれば支考の誠実さを示すものである。この「其」の省略を、現代人の硬直した思考力では埋め合わせることができない。一を聞いて十を知るといふ

用的推理力が退化してしまっているのである。ところで、この「其」を付して、現代人が理解しやすいように其人・其空間と換言してみる。一見妥当と思われるが、人は人物を抱括し、場は空間に抱括される関係にある。其場を其場所としても、場が場所を抱括する関係にあるため、両者の関係に等価性を認めることは困難となる。人間（作者）との関わりの軽重への思いが「其人」と「面影」の違いを生み、雪や雨などに対する思いが、「其場」とは別の「天相」の分類をなさしめるのである。そこには揺れ動いて止まない人間の原初的感受性が作用していることを見逃してはいけない。

八体はいずれも前句を思い遣るところに成立する用語である。人間の原初的感受性に触発される作者自身のさまざまな八生まの思いVがそこには籠められている。現代日本人はこの八生まの思いVさえも觀念化してもて遊び、それを八生まの思いVと信じ込んでしまっている。「事実在り得るものは付く、在り得ないものは付かない」とする考えも、現実世界における原初的感受性の喚起を大切にすることであり、連句を単なる美的架空世界の産物と定義付けることの不当性がここに指摘される。体験を事実による実体験、事実による仮想体験、事実によらぬ架空体験と分類すれば、発句・脇は実体験、他の付句は実体験と仮想体験によるものである。しかして、この仮想体験による八思いVは、八生まの思いVを追体験するに等しい。精神的に考えた八思いVではなく、魂に感じた八思いVである。思い

遣りが取沙汰される昨今、これらの発想法を見直すことは、連句の将来を考へるときに無視できない筈である。

俳諧師たちの生活感覚による分類方法は、現代人が見捨ててきた感覚を認識の基底に置き、言葉以前の原初的な感受性を潜ませている。素材としての「聳物」も、聳え立つものと解釈すると理解不可能になる。空中に姿を現わして手に取ることでできないようなものへの人生まの思い、この用語を成立せしめたのであろう。こうした分類方法は付句の発想方法と相関関係にあり、これを崩すことは連句の本質破壊に繋がる。現代的な考え方からすれば、「四道」は実に整然としており、理解しやすい。連句がこの「四道」を捨てて「七名」を採用したのは、前句を付句と向かい合うものとせず、前句を認めた上でその筋を受けながら対応の仕方を考えろという、高度な付けの手法によるものだからである。

### 蓮の糸

総て俳諧は前句を離れずして然も離れ、はなれて離れぬ様にあるべし。如何に句柄はけ高く飾りたり共、前句へ心通はずば不和なる夫婦のごとく家を齊ふ可からず。又いかに付たりとも一句の様は賤しければ詮なし。よくその心通ひたるこそ、めでたく覚ゆれ。是をたとへて云はば蓮の茎を折りて見るべし。切ばきれやすくしてしかも其糸絶ることなし。其如く打越をのがれ、前句の心を捨つるは蓮の茎を折るに異ならず。さて縁の詞心よく通はば、寄せ合の糸のつづけるが如し。

(芭蕉翁口授)

現代人に理解しやすい等価性のある語によって句付を余情付と改め、七名に付けの手法、八体に付所の説明を付して理解しやすくするのは、見習うべき方法である。新たな付けの手法や付所などを考案しようとする場合にも、合理性以前に、まず俳諧師たちの感受性と生活感覚を大切にしなければなるまい。これは、精神以前の魂に眼を向けよ、ということに他ならない。本辞典の用語篇解説には、上手に句を作るなどという方法は書いていない。しかし、連句の本質的な機微に触れることができるような配慮はなされている。そこを読み取っていただき、実作される方々の心の成長に伴って句作の上達されることを祈ってやまない。また研究される方々には、資料や現代的理論ではその肌に触れにくい面があることをお知りいただき、文芸としての連句の本質を探究していただければ幸いである。

### 五尺の菖蒲

句の仕立は五尺の菖蒲に水を懸たるが如く、又池水よりすかすかと生出るが如く、滯丈ることなく、け高く、口にはらず、ゆるゆる仕立たらんぞ、めでたかるべし

(芭蕉翁口授)

### 乞食袋

乞食は袋一つより持たぬものなり。貰う物を何によらず是に収めて常に隠す。其入用の時撰みて用ゆ。俳諧の学問も是に同じく、あらゆる世事和漢のことくさをよく見聞置て、用ゆべきにはあねどみな袋にて蓄ふべし。

(芭蕉翁口授)

## ② 起 情 二 つ

—— 参考篇 雜感 ——

宮 脇 真 彦  
(成城学園高校)

支考が説いた連句に関する論の中で、現代に至るまで大

きな影響を与えているものに、七名八体説がある。この七名八体説は、句を付ける時の基本的方法を示したもので、七名とは有心付・向付・起情、会釈・拍子・色立、遁句のことを言い、いずれも付句における案じ方、前句へ付ける時の趣向の立て方を言ったものである。また八体とは、前句のどのようなところを手がかりにして、どこをねらってどのような句を付けるか、という観点(付所)で分類されたもので、其人・其場・時分・時節・時宜・天相・観相・面影を言う。支考はこの案じ方(七名)と付心(八体)とに關つてそれぞれ次のように説いている。すなわち、付句の趣向を案ずるには、打越やそれ以前に出されている句を十分考慮に入れて、そこから変化し、離れるようにせよといひ(『俳諧十論』「第九変化ノ論」)、またそうした趣向の変化は、前句と違つた付方・付心をもつて付けてゆくことによつて自然と付句にもたらされる、というのである(『東西夜話』)。つまり、七名八体説は、連句一巻の変化を考慮して付けてゆくための基本的方法を示したもので、いわば実

際論だと言ふことができよう。

この七名八体説は美濃派圈のみならずさまざまに流布してゆく。堀切実氏は「雪門系・杉風系など広く流派を越えて用いられるようになり、『七名八体附合要録』や『付合手引蔓』など、多くの啓蒙的な指導書を生んだ」と述べている(『付方八体説の成立』『蕉風俳論の研究』)。事実その影響がいかに大きかつたかは、七部集の注釈を読んでみてもそこに七名八体の用語によつて付合を解説しているものが多いことから証することができるし、今回の『連句辞典』の「参考篇」のための調査においても、七名八体の用語が支考以後の論書・作法書などにいかに多用されているかも実感した。あるいは近代以降現代に至るまで、とくに芭蕉連句の注釈書の多くにこの七名八体の用語が散見されるのは、その影響の大きさを物語っていると見てよいであらう。

だが、仔細にそれらを検討する時、支考が『俳諧十論』において詳述した七名八体の用語とその意味とをそのまま受けついで用いているものと、用語自体は七名八体の用語



を使っても支考が用いた意味とは異なった意味で七名八体の用語を用いているものがあるのは、注意をひく。それは例えば、『北国曲』で露川が付した歌仙の解釈に使われた用語に対して、支考が「誤用」として難じている(『蓮の葉風』)ような、「誤用」として片づけられる問題なのであるうか。例えば雪門系蓼太門の珪山編『二弟準繩』所収の「雪中庵嵐雪伝 附合十五条の証句」には、理附・違附・其人・其場・時分・時候・離附・景色・向附・迎附・響・寂・撓・句の名目をあげているし、あるいは杉風門系二代宗瑞編『杉家俳則』には、有心(其人・観想・面影・起情・空撓・向附)・会积(其場・对附・色立・拍子・時宜)・逃句(天象・時分・時節)とあって名目自体はほとんど一致しているが、位置づけが異なっている。堀切氏は前掲論文において、これら名目の比較検討を諸種の芭蕉伝書について行なっているが、それらを見て考えさせられるのは、これらの名目がそれぞれの俳諧流派における連句に対する解釈を背景にしているということである。支考から見れば「誤用」であっても、「誤用」は「誤用」なりに付合の方法を示しており、その相違した意味合いをとらえることが、その流派においてどう付合が考えられているかを明らかにすることになるのではないか。勿論これは公式論で、実際の検討を加えてゆかねば、こうしたことは言えるものではない。『連句辞典』に参考篇を入れようと考えたのは、こうした用語の幅を一つ一つの用語について確認しておこうと思ったからであるが、調査書目の少なさと、

検討すべき時間の不足とから、「誤用」をカットしたり、支考の用語にないものをカットしたりしてほとんどその目的は達せられなかった。今後の課題としたい。一例をあげて、こうした問題の所在の一端に触れておきたい。冒頭に示した七名八体ののうち、七名の一名目として「起情」がある。これは、支考のいう三法(有心・会积・逃句)のうち有心の一。支考は次のようにこの「起情」を説明している(『俳諧十論』)。

前句より情を起すといふは、連座の人の変化を思はず、縮れば(人情句が続けば―私注)五句も三句もちぢまりて、人のさまのみやかましく、伸れば(叙景句が続けば―私注)五句も三句ものびて、そこら風景がちならん、たとへば「村雨の日影」といへる「田中の松のあっちこち」と付たらん、爰にて前句の情を動かして「我は狐に化されたやら」と付たる、これらは前の「あっちこち」といへる詞のあやを聞とがめて、無理に此情を拵へたれば、此名を起情とはいへる也。つまり連句を変化させてゆくための手法の一つで、前句以前に叙景句が続いたとき、叙景句を転じて人情の句を付ける場合の案じ方を指して言った言葉である。そのことは、要領よく美濃派の付合についてまとめている『俳諧鸚鵡談』(麻衣山人著、明和七年自跋)に、「風景二句も引つゞきたる時、三句目へ又候風景眺望の体を作すれば弥々戻る。或は三句引張故、爰に風景をにらみて人情を起す付方を言」とあることによっても明らかである。こうした「起情」

の用例は、『七名八体合要録』（梅人編、天明三年刊）や『付合てびぎ蔓』（几董著、天明六年成）などの作法書などに具体的に詳述されているほか、注釈書類においても『猿みのさかし抄』（空然著、文政十二年刊）や、葛飾派の注釈とされる『俳諧七部通旨』（錦江著、嘉永五年自跋）にも多く用いられ、あるいは極く稀に用いられるだけであるが、『秘註俳諧七部集』（伝暁台注・政二補、天保十四年成）にも用いられている。

ところが、こうした「起情」の用例に対して、次のような例が『続夏引集』（元子編、宝曆十二年序）に見られるのである。

畑うちも畔に小筒のうしろ楯

女のつれに無念こらへる

案方逆附は其人の起情也。野遊の道すがらにして、女の供したるは年のほど四十の坂越たる男なるべし。後楯の詞より前句の情を起したる所寄也。」

病人に奢が付てめでたがり

傾城どのに母のたいめん

案方転附は其人の起情也。独息子の命ひろふたる親ごころのよろこびには、いかなるものをも娘とながめまほしかるべし」

笹上に飯のかげんを焼おほへ

いつか内証は女房で居る

案方随附は其人の起情也。飯のかげんも心を添る傍、輩中の転び合と見出して余意深し。」

先財布出して飛脚の汗拭ひ

ひろふた跡は我いのちなり

案方転附、其人の起情也。財布渡して先吐息に汗おしぬぐひたるは、物見の松にからきめ見たる冬枯の飛脚なるべし。」

思ふほどたゞ孝行の行たらず

おとこ嫌ひの夢は覚たり

案方転附は其人の起情也。此娘の心高く、年もやゝ甘過たるうら枯に、小町が老をも身のうへに打驚れたるさま成べし。」

これらによって明らかのように、『続夏引集』における「起情」の用例は、全て前句に人情の句があり、人情の句に対して人情の句を付けた例である。支考の観点で言えば、これらは皆「起情」の誤用ということになる。すでに見たごとく叙景の前句に人情の句を付けることが「起情」の意味だからである。

『続夏引集』は、二世周竹が序を付していることから明らかのように、雪門の俳書である。前集『夏引集』宝曆十一年序、桃鏡編）と同じく付合三句のわたりを实例五十九章あげて説明したもの。この前集である『夏引集』には、「案方転付」「其人の起情」などの用語は示されておらず、あるいは元子が独自に用いたものかとも思われる。が、「案方」に用いられている「転・随・放・逆」の「四道」は、前集に「むかし芭蕉の翁、仏頂禅師の会下に参じて投子一椀の茶に俳諧の三句目を悟て、転・随・放・逆の

四道に自社を得られけり」とあつて、転じのルールを示しているところを見ると、強ち兀子の私意に出たものとも思われぬ。少なくとも兀子が用いた「四道」の名目は、雪門で用いられていた三句離れの方法を踏襲したものと見られる。(事実『続夏引集』には「夏引集」に載せる「附合四道」をそのまま巻頭に掲げて、付合のルールを示している。)

『続夏引集』の「起情」(「其人の起情」)は、「四道」にどのように結びついているのであろうか。「四道」は、次のように定義されている。

- 一、転 前句の人情・其場・其時の一転也。  
放の付句に差別有べし。
- 一、随 前句の姿情を動かさずしてしたがふなるべし。
- 一、放 前句に対して風雨・寒暖・陰晴・四時のはたらきとするべし。
- 一、逆 前句の姿情を見直し、多くはこなしの用とみるべし。

『続夏引集』の例に、「転附、其人の起情」が多いのは、転附が「前句の人情……の一転」として定義されているのと関りが深い。また「放」と「起情」とが結びつかないのも、放附がいわば会釈の付合であることを考えれば納得がゆく。こうしたところから考えると、『続夏引集』における「起情」は、前句の人情を一転して、そこに新しい人情を趣向する付、あるいは前句の薄い人情をより強く打ち出す付として用いられているように考えられる。

このことに関して思い合はされるのは、几董の『付合てびき蔓』の次の部分である。

二の尼の近き霞にかくれ住

七ツ限の門カ蔽カく音

前句、尼といへるに寺と趣向を定め、七ツ限に門をとざすとせしが、一句の作也。是、八体に曰其場也。

叩くと外の情を起す也。

この最後の「外の情を起す」とは、尼に対して叩いているもう一人の人を趣向したということである。もともと几董の「起情」の用例はすべて支考流の「起情」を忠実に守っているわけで、右の部分はかなり特殊な例ということになる。が、「起情」が叙景句から人情句を案ずる付という、七名の一つとしての定義を離れて、かなり幅のある用られ方をされている姿は看取することができるのではなからうか。かくして起情は、前句叙景句という条件を離れることによつて、付句に新しい展開の情を趣向する方法として変容する可能性を持っていたのである。

### 目當の柱

旅路など馴ぬ処に寝て暗きにあと、夜起きてまどふものなり。東西南北をよく見定め置きて、其うち目當の柱一本を覚へ、それにすがり心を静めぬれば東西は知るものなり。其如く前句、前のすがり所をよく考え吟じ返して、その主たる処をもとめ出すべし。

(芭蕉翁口授)

### ③ 連句研究の現状

長 島 弘 明  
(名古屋大学)

『連句辞典』の文献資料篇を編むに当って多少まとまった数の連句研究文献を読む機会があったので、研究の傾向、問題点等を覚え書風に書くことにする。

子規の俳諧革新運動により、連句は文学の表舞台から姿を消した。勿論、伊勢派・美濃派の系譜に列なる宗匠たちや一部の愛好家たちにより、連句の伝統は細々と守られたが、基本的に連句型式は生きた文学型式ではなくなった。

近世の俳諧が、連句を切り捨てることによって俳句という近代の文学型式として再生した経緯は周知の通りだが、そうした経緯は後に様々な問題を残した。例えば、俳諧から俳句への変貌を、短詩型式における連続と見るか、継続と見るかという問題。言い換えれば、古典としての俳諧と、近代詩歌の様式である俳句とは、どこまで同じでどこから違うのかという問題である。そしてこれはさらに実作と批評・研究の関係にも影響を与えてくる。

実作者と批評家という図式は、基本的には創作意識と批評意識が明確には分離していなかった近代以前のものであるが、短詩型の俳句については、創作と批評・研究の（幸福な、というべきか）混融が、近代以降も保たれて来た。

碧梧桐、井泉水、楸邨らの俳人の芭蕉・蕪村研究も一見我々には自明のことと映るが、他ジャンルの場合を考えると、決して自明のこととは言えない。そこには実作者と批評家（あるいは研究者）を自明のことと思わせる短詩型独自の事情があり、さらには俳諧から俳句への型式的連続が前提とされている。しかしながら、その一方では、当然のことではあるが、俳諧と俳句の断絶を重く見る向きもあり、古典としての俳諧研究と、近代俳句の創作とは別物であるとする見方もあり得よう。現に、実作経験を持たぬ俳諧（さらには俳句）研究者も現今珍しくない。

ひるがえって連句を考えてみるに、幸か不幸か、実作の伝統が近代に入って一旦切れている。連句は、むしろそうした伝統との断絶を逆手にとるべきであろう。明治以降、連句実作と連句研究の蜜月時代は遂になかったという一見不幸な事態を、むしろ積極的に評価すべきであろう。昭和四十年代半ばからの、いわゆる連句ブームの中で、なしくずし的な伝統回帰に終わらない、新しい連句の今日的な意義が模索されてよいかと思う。

とは言え、連句の今日的な意義を述べる資格も力量も私

にはない。専ら古典研究の範囲内での連句研究に話柄を限定したい。

\*

連句研究においても、発句の場合と同様、芭蕉中心である。連句型式の完成者が、芭蕉と蕉門の人々に他ならないという史的認識がそこにはある。これは別段、近代の研究者が打ち出した見解ではなく、近世において既に然り、江戸時代における連句の注釈は、いわゆる芭蕉七部集に集中している。貞門も談林も、あるいは蕪村の連句も、例えば近世後期において熱心に読まれた形跡はない。近代に入つての連句研究も、江戸期の史的評価をそっくり引き継いだ形になっている。近代の芭蕉連句研究には、古くは露伴・水穂の卓抜な評釈、近くは島居清氏、阿部正美氏らの精緻で優れた註解があり、発句偏重の片寄つた芭蕉像を全円的なものに補正しつつある。しかし、一たび蕉門以外に目を転じてみる時、皆無とは言わぬまでも、注釈さえ極めて寥々たる有様であることを思い知らされる。例えば蕪村の連句にしてから、古典文学全集の類に略注を付したものが多少ある他は、連句の専著としては、野村一三氏『蕪村連句全注釈』、暉峻康隆氏監修『座の文芸 蕪村連句』、中村幸彦氏『<sup>此は</sup>一夜四歌仙評釈』、昭和女子大連句研究会編『蕪村連句研究』があるに過ぎない。しかも全ての蕪村連句が採り上げられているわけではない。蕪村連句が、芭蕉以降の連句の常として、芭蕉連句を一応の基準としていることは言うまでもないが、式目・作法の細部や、個々の句の付け

方はやはり微妙に異なる。数限られた蕪村の専門家はともかく、率直に言つてこのままでは我々には蕪村は読めない。しかし、まだ蕪村の場合には几董の『付合てびき蔓』あり、個別の研究論文もあることと見当らしきものがつかないではないが、これが同時代の大阪の俳壇の連句となると、手も足も出ない。

俳諧が雑駁なエネルギーを持っていた時代の守武の俳諧、あるいは最も俳諧的な俳諧である談林の連句、史的な影響力から言えば最大の勢力である美濃派・伊勢派の連句、芭蕉連句とは全く異つた作風の、江戸座をはじめとする都市風の俳諧等々、当然読まれるべくして、注釈のないために放置されている連句は多い。沢井耐三氏の『守武千句』考証、飯田正一氏の『貞徳紅梅千句』乾裕幸氏の『大坂独吟集』註解等の優れた業績もあるが、なお多様な注釈の出現を讀者として望む。

連句独特の用語、また式目・作法等については、時代による変遷もあつて、難解極まりなかつたが、今度の『連句辞典』の記述が一つの指標となる筈である。「参考」欄において、用語の出典が示されることにより、その時代的な語義の揺れも、一応の見通しがつくようになった。従来は、例えば「人情自・他」についても、「向付」についても、諸解様々であつたが、ようやく共通の土俵が出来上がったと言つても過言ではない。

文献資料の欄を見渡して気が付くのは、連句芸術の本質を問題にした考察が、意想外に少ないことである。能勢朝

次氏に『連句芸術の性格』という古典的な名著あり、以後の入門・概説書でも必ず連句型式に関する記述はあるか、式目や作法の説明を突き抜けて、付合文芸の根本的性格に立入ったものは多くはない。最近では乾裕幸氏の一連の著書、西田耕三氏の「言語表現としての俳諧」、堀信夫氏の「座の文学、連句」あたりが、問題を根源にまで掘り下げている。例えば堀氏の場合、カイヨワの『遊びと人間』を手掛りに、連句の遊びとしての動態を明らかにする。連句が遊びとは何を今さら、という批判もあり得よう。しかし、通念、曖昧なままの理解は曖昧なままの理解以上の何ものでもあり得ない。野暮を承知の上で、言葉としての分析をあえて加えた堀氏の労を多とする。連句が遊びであるということは、思われるほど自明なことではない。それは検討に値する一つの命題である。例えば、近世の俳諧が俳句として生まれ変わる時に、切り捨てられたのが遊びとしての連句であった、というようにさらにもう一つの命題を立ててみれば、その刺激性は明らかであろう。

連句と隣接する雑俳の研究も進んではない。川柳についてはしばらく措くとして、まともなものでは他には鈴木勝忠氏の一連の仕事と、宮田正信氏の『雑俳史の研究』が数え上げられる程度であろうか。雑俳までを視野に収めた俳諧通史としては鈴木氏の『俳諧史要』があるのみ。この方面への研究者の関心の低さが、俳諧（連句）の史的変遷の立体的把握を著しく困難にしている。雑俳の風が俳諧（連句）の風にどういう影響を与えて行ったのか、そこを

見定めない限り、連句の俳風の変遷の記述は片手落ちにならないを得ない。

昭和四十五年にはじまる安東次男氏の「芭蕉七部集評釈」あたりを目に見えた契機として、現今まで続く連句ブームが始まったという。昭和五十年以降に限ってみても、連句入門書の刊行は、十指にはるかに余る。昭和五十九年には「俳句研究」が「現代と連句」という題で二度にわたって特集を組み、本年には「国文学」が「連句のコスモロジー」という特集号を出している。いずれも画期的なことである。反響は国内のみにとどまらず、外国人による外国語を用いた連句も試みもあるという。連句の現代的なあり方、今日的意義は、あらゆる方向から論じられてよいし、また論じられるべきであろうが、それと並行しつつ、古典としての過去におけるあり方、意義（古典として現代にどういう意義があるかではなく、それ以前の問題として、過去の時代にどういう意義があつて存在していたか）が、いままし明らかにされる必要がある。

現代連句が、古典の連句に対してどのような距離をとるべきか（あるいはとらざるべきか）、今の私には解らないが、その答えを求めるためにも、古典連句の研究の一層の活性化が望まれる筈である。

## 『連句辞典』

への御意見御質問を  
小誌宛お寄せ下さい

## ④ 用語遍歴

杉内徒司

戦前の『俳諧新辞典』（伊東月草・高木蒼梧共著 昭和十四年十二月刊）は旧派の世界を解説したものと言えるが『連句辞典』は、現在の連句界を照射する編集方針のため、「用語篇」に「旧派」の影が薄くなっているのは当然である。すでに廢語同然の「一列判者」「通り句」「等類」などはのせてない。「旧派」というのも「近代連句略史」に唯一カ所のついでにだけだから「索引」にはのせてない。

新しい判断を二つあげてみると、まづ、花火を正花からはづした。古來秋の正花とされてきた花火を否定したのは大胆のようだが、実状は我々はこの二三年、花火を夏の季語として考えて作句してきているので、普断の判断をそのまま示したにすぎないのである。

また、『去來抄』の「うつり・ひびき・にはひ・くらゐを以て付くる」は、元禄時代の説明としては充分であったにせよ、今日の実作者には理解しがたい。幸に宮本三郎氏はこれを、「余情」として説明されているので、「余情付」としたが、この取扱いは他書にはないから注目をひくこととなる。

ともあれ「用語篇」を播くと、いろいろの想いが浮んでくる。自戒のためにも、そのいくつかを書とめておく。

一 よみ方

取上げる用語（三二四語という結果になった）は勿論だが、文中の用語にもルビを付ける事を第一回編纂会議で私は主張した。実作者の間で使われている用語に、さまざまのよみがあり、私にもいろいろの経験があるからである。

雑（ぞう）

俳人協会主催「連句の集い」が昭和五十二年六月から月一回、十七回ひらかれた折、私は俳人を連衆として十六回捌きをつとめて得難い経験をした。

私の両隣の捌きが「次はざつの句を……」「これはざつです」という説明を耳にして、「ざつ」というのを奇異に思い、何故「ざつ」というのがわからなかった。

私は三井武翁に「ぞう」と教わった。丁度その頃のNHK・TV・大河ドラマは「源義経」で、平治の乱に雪の中、三人のおさな子をつれて落ちてゆく常盤御前は九条院の雑仕（ぞうし）……という話なども出たので、すんなり「ぞう」とおぼえた。

俳人は日頃「当季雑詠」「雑詠選」に馴染んでいるので「ざつ」というのだと自得したのは暫く後の事だった。

しかし用語は一面時代とともに移ってよいと思っただけで、「私語雑談」を月例会では「しござつ談を禁ずる」と使って違和感がない。

治定(じじょう)

治定は「じてい」と武翁から教わった。従って他人に教へる立場になった時は「じてい」と教へた。

「じじょう」が正しいと気付いた頃には、私の周辺には「じてい」が普及していたので大いに悩んだ。考へてみれば、定座「じょうざ」も同時におぼえたのだが「じじょう」とよむ事までには気がまわらなかった。

その頃知り合いになった大阪在住の近松寿子氏から贈られた『連句をさぐる』(昭和五十四年刊)には「治定—じてい」とあった。

近松氏編著のこの本の連句の解説は浜千代清教授であり、歌仙の捌きは浜千代教授、橋開石両氏がされているので、「じてい」は誰の教へなりやと問合せをしたが、返事はなかったと記憶している。

なお本書には、胡蝶俳諧も収録されているので、「じてい」は胡蝶俳諧創始者林空花系の影響かとも思っていた。先日第五回連句懇話会全国大会でおめにかかった近松氏にたしかめると、空花師系からの影響からだとの事だった。因みに空花は野村牛耳門である。

脇起(わきおこり)

野村牛耳から「わきおこし」と教ったから「脇起し」と思っていた。

牛耳遺稿集『摩天楼』に左の文章がある。

時雨忌の張行だから芭蕉翁の冬の句

冬がれや世は一世の風のおと

を起句に据え、慣例によって捌く私が脇を付けた。こういう形式を「脇起しの連句」といつている。

(「冬がれ」自註自評)

「脇起」のよみを諸書に当たてみると左の通り「脇起し」が多い。

『連句読本』(井本農一・今泉準一共著)

—脇起し。

『連句への招待』(乾裕幸・白石悌三共著)

—脇起し。

『俳諧大辞典』—脇起し。「脇起り」ともいう。

『馨音』(井草麦雅喜寿記念句集)に左の句がみえる。

春惜む忌の俳諧は脇起し

このよみについては幾度も議論を重ねた末、伊勢派俳諧を身につけた根津芦丈の口伝通り「脇起り」としたのである。

## 二 新しいよみ

一般の式目書にはない多くの旧派の口伝用語を収録したが、現在の月例会で使われている用語も新しい解説を付したのせた。

面(めん)

『俳諧大辞典』には次のように出ている。

おもて、「面」と書く場合はある懐紙の表なり裏なりの見通しの句—歌仙は十二句—をいう。

この面(おもて)をわれわれは「めん」と呼称し、「この面では……」「面去りだから……」と使っている。



これは他書でふれているのを見かけないが、今後「面」意識が出てくれば実作者には大変便利だと考えている。

植物(しょくぶつ)

『俳諧大辞典』で、「うえもの」と表記されているが、「しょくぶつ」が実際的なので「しょくぶつ」とした。

### 三 存疑

あさり場「あさり場の参考欄は次の通りだ。求食(あさる)自の句に又自句付るをいふなり。あさるとは鳥の餌をもとむるをいふ、友鳥をもおしのけてあらしひ求むるものなれば、それよりたとへていへり」(『俳諧名目抄』)

我々は「あさり場」とは、両吟歌仙の場合単なる「変り場」と考えている。実状は「あらし求むるもの」ではないので、語源的に処理に苦しんだ。他の辞典を播くと

①「連俳の会席で自己の付句すべき時に案じ煩っている場合に前句の作者が代って続けて付ける」(『岩波・古語辞典』)

②小学館・『日本国語大辞典』も大体同じ。

③「求食。餌を求めてあるく。主に鳥獣などにいう。

(宇田零雨・『芭蕉語彙』)

とあって納得がいかなかったところ、校正期間中に友人から次の新聞切抜記事の提供をうけた。

江戸時代から伝わる鋸鍛冶の言葉は独特で手仕事の工法とともに受け継がれてきたのだろう。

「あさる」という作業。鋸目をつぎつ互い違いに反対の面に傾ける。

(朝日新聞夕刊61・3・18)

俳諧用語「あさる」と鋸鍛冶用語「あさる」は語源をひとつにするものか、とも考えてみるが、今のところ探究の手がかりがない。

杉形(すぎなり)

第三の三つの形のひとつ「すぎなり」はどういういみか。西鶴『日本永代蔵』の巻一に「杉ばえの俵物」という一節があるが、米俵の積み方の杉ばえが杉形だと言われている。

そのように「連句の集い」で説明したら、受講生から「杉形は杉菜形ではないか」との質問をうけた。

杉菜は土筆の成長したもの、茎にある節(袴ともいう)から容易に切れるから、五・七・五の韻律の「杉形」のもとは「すぎななり」ではないかという説明であった。今回はこれに関する文献を探したが見当らず、折角の仮説が定着しなかった。

### 四 未熟用語

「はまる」は用語として独立していないが、との説明付で取上げであるが、それ以下のため割愛した用語に「競い付け」がある。

月例連句会の付句のやり方は、出勝とか付勝とかいうやり方とも少し違う、むしろ、新しく「競い付け」という表現がよい、と野村牛耳が言い出したのは昭和四十七年頃のことだった。牛耳が育成した東京義仲寺連句会でも現在の用語は使われてないが、林空花を通じて関西に流れ、『連句をさぐる』には二ヶ所この語が記されている。

# 絶頂の城

付勝練習歌仙

東 明 雅

投句締切  
10月20日

絶頂の城たのもしき若葉かな

夏鷺のこだまする溪

枕蚊帳熟睡の夢の安からん

驟る番茶に茶柱の立つ

抄らぬ稿にしらじら月さして

新聞少年やや寒の道

通草の実供へてありぬ岐神

嘘のキッスが本物となり

親が居て子が居て電話まきならず

ばりばりと炒るちぎり莧蕪

角乗りを終へて筏師まづ一献

江悠々と冬靄の中

凍てる月ロシアの古都に妻とあり

十四句目

治定 為すこともなくつい鼻毛抜く

燕村 正江 樺晴 東夷 隆秀 たかし 貞子 昌子 妙子 千町 杉亭 天留子 哲

正雄

前句にロシアという地名があるために、これにとらわれた付けが多く、近すぎる付けが多かった。尤も、場合によっては、どんなに前句に近くてもよい場合もある。発句と脇句の関係がそれであるばかりでなく、一卷に一か所位は前句に近すぎる句があっても、かえって変化があってもしろいのであるが、今度の付句は、既に打起が「江悠々と……」と何か大陸的なところがあり、前句にはっきり地名が出ている。そこにまた1のように「スラブ舞曲」というような語を出すのは、いわゆる根があるというものであらう。この点は2も同様で、ロシアに対し日本はやはり根があるということになる。3・4はともに第二次大戦の思い出がもとになっている。ロシアから、戦傷・軍歌の連想が出るのは自然であるが、自然すぎてもおもしろくない。もう一工夫あるべきだろう。5はちょっと変わっている。この切符は乗物の切符でなくて、劇場の切符か。しかし、何か前句との付味があまりよくない。6は打越から変化し、一つの場面を作っている。7はロシアのホテルか何かで、自民党大勝のニュースでも聞いたのか。時事の句を取り上げたのは結構だが、何だか、新聞の標題を投げ出したように、もすこし何とかならないものだろうか。8は流石に変化がありおもしろい。咳は冬の季語だが、冬季は三句まで続けてよいことになっているから差支えはない。しかし、打越からの一種丈高い気分が続くような気がする。9は昨年旅行された時、実際にあったことらしく、この句はおもしろかった。10もこの一卷にまだ四足が出ていないところ

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
教師の事故を生徒見上げる	馬車曳く男掛声をして	カーテンコール拍手止まざる	オペラグラスで覗く喜歌劇	つれづれのまま方文記読む	名刺数枚ポケットに入れ	民俗舞踊にはじける若さ	画布に向ひて初心忘れず	ふとつちよおばさんうまい商売	また痛みだす盲管の傷	故郷偲びミシン踏む部屋	原発の事故心痛める	ピカソ・ダビーンチ・ラファエロを観る	聞き返しても云へぬ御名前	猫に土産のよき鈴を買ふ	円で買物ドルの釣り来る	開幕ベルにおとす咳 <small>しほなき</small>	ダブル選挙に自民大勝	映画受賞のしらせ受けとる	切符なくせしくどき言ひわけ	暇の友へ軍歌泌みみに	心の底にうづく戦傷	日本ではやるともしびの歌	スラブ舞曲の哀調を賞で
吐	麻	篤	正	美	美	治	和	隆	清	妙	千	淳	天	孝	哲	みづ	あかり	よしえ	美	采	遊		
紫	子	子	江	鈴	保	子	力	子	秀	之	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	女	遊	

からの狙いであろうが、確かに穴である。11ソビエットの人の名前は確かに覚えにくい。これも機智に富んだ句である。12これはまたこの一卷に人名のないところを突いたベテランの句でおもしろい。だが、8言でつたように長が高すぎ、変化がないのが欠点である。13ソビエットの原子炉の故障は確かに心を痛めるものであるが、これもやはり近すぎはしないか。14これは何かうらぶれた夫婦の生活を偲ばせる。たゞ「故郷偲び」がついている為に、三句続いて旅のことを詠んでいるという感じを免れない。15は3よりも手がこんでいるが、盲管といえは直接戦傷とは言はないにしても、盲管銃創はやはり戦傷の一種だろう。16になつてはじめて、気分が変わり、明るい庶民的センスの句になつた。ホテルをめぐって物を売りつけて行くおばさん。ずるい半面愛嬌よく憎めない姿が目につく。9よりもこちらの方が一層おもしろい。17も室内に入つたのはよいとしても、表現が固く、あまりまじめすぎる。この辺では16みたいにしふざけた方がよい。18は前句と反対の気分を出してこれこれも悪くはないが、下七が四三なのが致命的である。19もさり気ない所が悪くない。20の方丈記は変わっているが打越に「行く川の流れがあつてどうもまずい。21は傑作だが、一巡の方なので遠慮した。それらに比べ、治定された正雄さんの句は、打越の転じ、前句への付味上々で、通句的なトボケた味が一卷の変化をつけている。これにどんな句をつけ、どんな展開を示されるか期待したい。雑の長句で、自他半以外なら、どんな句でもよい。

# 第十八回 猫 蓑 会

二十韻 六作品

七月十六日(水) 参加者三十名  
文京区新江戸川公園松声閣に於て興行

瀧見翁

六澤篤子 捌

睡蓮

島田和世 捌

歩道橋

杉戸金一 捌

流木の杖のよろしき瀧見翁

篤子

睡蓮や巻葉は風に立ちあがり

和世 歩道橋一段毎に暑さかな

金一

翅をやすめしうすばかげるふ

正江

水尾を引きつつ泳ぐ鴨の子

みづゑ

買物籠にひかる青梅

あかり

あれこれと茶事の仕事のととのひて喜久子

喜亭

赤青の待針の玉数へみて

和子

紅蜀葵すつくと咲けば華やきて

啓世

部屋の隅にて遊ぶ幼な子

杉亭

文句うるさい茶の間ギャラリ

凡子

砂場にひとり遊ぶ鍵っ子

徒司

パイプルの開かれしまま夜半の月

喜亭

月高し友と肩組み歌ふ坂

秀子

窓をあけ庇にかかる月を待つ

てるよ

すんとと脱いで秋冷の肌

同亭

新酒に酔へる仮面浪人

ゑ子

虫すたく中君の靴音

世よ

手が触れてわざとおどろく蹄の輪

同亭

妊りてぞっと身に沁む金のなさ

子同

お揃ひの指輪を買ひし西鶴忌

よ司

怠け心を見すかされをり

同亭

鳩の街から洲崎亀戸

同子

悴む手より投げし賽銭

世司

九十九折胸突八丁七曲

同亭

チャトランを見たさにつづく長い列

秀世

産声のパンダへ送るVサイン

よ世

露天の風呂につかる遊俳

同亭

旅の番組降りる六輔

秀世

高原に鳴るアモーレの鐘

よ世

狐火を夢か現かたしかめる

同亭

お迎ひの胡瓜供へてなむあみだ

秀世

かつらかと疑われたる古写真

り世

雅楽流れてマッパ照る月

江篤

銭湯で使ふフランスンシャボン

ゑ子

ささやき神の耳に囁く

り世

SPもVIPも腹の空き時か

江篤

刈上げのマスカン滑る雪蹴立て

凡子

常磐木のもとでほごぎし衣のひも

り世

痛風持は親子代々

江亭

乱反射する凍谷の月

子秀

崖の下から助け呼ぶ人

一り

坂東の一番札所夫妻箸

同亭

膝小僧抱へ見果てぬ恋の夢

秀世

塩の道千国街道凍る月

世司

合ハイ以来ステディの仲

同喜

三十年目で深くなる仲

ゑ子

まだ外廁多き過疎村

よ司

御湯割の胃の腑に泌みる計の知らせ

同喜

「音羽屋」と掛けし途端に歯をとぼし

秀世

全世界飢餓救援のコンサート

よ司

魚屋の軒初燕来る

同篤

机上に密と黒塗の枡

ゑ子

鳥帰る日の聞香の会

り司

花は日にかさなりあひてさかるなり

同篤

大いなる魚拓がある花の宮

凡子

花疲れ衣桁にかけし江戸小紋

り司

綿飴なめてゆらすふらここ

同篤

凱旋したるヒーローに蝶

凡子

子猫三匹くんづほぐれつ

り司

四十雀

高瀬美保 捌

梅雨あがれ

中川 哲 捌

返り梅雨

原田千町 捌

四十雀の親子遊ばせ昼の雨

瓢の花の白き中庭

心澄む臨書の筆をとどめみて

オートバイ駈り呼びに來る友

ガウディのゆがみし塔に月掛り

忘れ扇をそと取り出す

胸のうちお見とおしなり萩の風

思ひがけないホールインワン

紹興酒口あたりよく飲み過ぎて

膝の小猫の大きいびきかく

長老がよりにて選挙の後始末

皿の鮮ににらまれて居る

刃の如き氷柱を折れば月こぼれ

言訊いやとすねるふりをし

抱かれて燃えて光って土佐珊瑚

壁の般若がほのとわらひぬ

連絡船明るき海に波しぶき

なすことのなく霞む遠山

花吹雪冷えしひとひら掌の上に

春の日傘の連なりてゆく

美保

貞子

正雄

麻子

一恵

同

貞

保

麻

雄

恵

麻

貞

麻

貞

麻

恵

雄

保

雄

梅雨あがれ茅舎浄土を目前に

花魁草の咲きそめし庭

香りよく挽きし珈琲供されて

ちよつとひと言猫に挨拶

山の端を全き月の今離る

綱も女もかけし秋場所

さりげなく上衣着せやるそぞろ寒

フェリーボートで逃げる韓国

嘘八百並べてひとを笑はせて

一合壺にひびく出囃子

鶴見あぐる空を鶴渡る

朝餉に寒の蜺買ふ月

階段の陰で素早くキス盗み

夫は夫人は情人なり

十九にて剃りたる母の眉涼し

掃き清めたる神社境内

腰伸ばしゲートボールに興じゐて

ほろろほろろと亀が鳴くなり

上千本三分の花に霞立ち

教師は若し遠足の列

哲

明雅

久美子

孝子

淳子

孝

淳

雅

久

孝

雅

孝

淳

雅

孝

久

同

雅

久

淳

ひねもすを池の水の輪や返り梅雨

わくら葉載せし番小屋の屋根

スモックの園児等声の高らかに

宅配の荷をいそいそと解く

釈迦牟尼と酒を酌まざる月見宴

閨秀作家笑みの爽やか

恋占を習ふほほづきふみつつ

踊る猫とかホワッツ・マイケル

新宿が都心になる日近すぎぬ

重役候補肥満体質

無理偏に拳固と書いて何と読む

鴉かあかあ騒ぐ神苑

たこ焼きを突つきふたりは異母兄妹

西へ逃げよか北へ逃げよか

立て鏡アントワネットに冬の月

湯婆の湯で顔を洗って

先代の遺せし別墅煤けたる

山を後ろに丘の広がり

花疋花の巴に佇ちて無我

春の緑の抹茶一服

千町

遊

彬風

節子

弘子

風

遊

町

弘

節

遊

風

遊

弘

節

遊

風

弘

町

節

二十韻 鷗外 居

鈴木春山洞

鈴木春山洞

鷗外居猫蓑衆や新樹燃ゆ

かすかに聞え来たる庭滝

手づくりの大福の餡塩っぱくて

尺差し指ぬき散らばりしまま

青北風に波打ち返す宵の月

何ンにも知らず妹の嫁く秋

長き夜は簞笥の環に布を巻き

小銭を借りる癖のある奴

貰ひ手もなくそのまゝ居着く犬

軒の氷柱のとくる光彩

雪しまきチエホフの墓ぬかづきぬ

シートベルトを締めよてふポリ

歎呼して旗をうち振る路も狭に

陰陽石は街のはづれに

ラブホテル出でから寄りし書道展

お施餓鬼流し月のゆらゆら

襷がそつと皮脱ぐ藪の中

母屋より声酒持って来い

太棹の音に散りかかる花乱れ

馬鹿貝三つ浮かぶ塗碗

昭和六十一年五月十二日 首尾

於 東京上野池之端鷗外荘

鈴木春山洞

杉内徒司

東明雅

秋元正江

下鉢清子

原田千町

式田和子

洞

雅

町

江

和

司

町

和

雅

江

清

司

一期一会。ふつと、そんな詞が頭の中を横切つて消えた。明雅

先生の暖い御言葉に甘えて参上した席で、発句をと所望され、即

興の一句を御挨拶に。と明雅先生から「本日の御捌きは春山洞さ

んにおねがいします」の御提案があった。我が耳を疑い、高

い動揺の波が胸の中を塗り掠めた。辞退をしたが、許されなかつ

た。それは、となつて、なお深い逡巡の中にあつた。逡巡がな

かつたといつたら嘘になる。？が、やがて逡巡が感激に変わつて行

つた。今日までの連句修行の全てをかけて捌き、その上での御指

導を冀おうという気持になり、存分に一期一会の精神に生きよう

と決心した。それが猫蓑（会）ぶりなのであろう。毎回パスする

ことなく、一回ごとにお一人で五六句提出（付句）されるのであ

る。捌が「いただきます」と発言するまで「ばーばら、ばーばら」

提出運動は続行するのである。毎回、常時、捌きの前には堆い句

稿の山が出来た。崩しても崩しても、出現し続けた。どの句もど

の句も都会風な粧いを凝らし、俳諧性に富み、連衆それぞれの個

性的なものまでは看取出来なかつたけれども、どの一句も全て捨

てたいだいたのである。将に捌き冥利に尽きた一巻と言うべきで

あろう。

捌きが捌くことに専念出来ることが有難く楽しかつた。充分な

お喋りも笑声も湧き起りながら、捌きが捌くことに専心しうるこ

とが嬉しく楽しかつた。式目の解説もせず、付句の催促もせず

に、ただただ捌くことに専念出来た句座を体験させていただいた。

東京の真中で野鳥の声を聞く、明治調の枯淡な句座は庭滝の響きもころかよつた。

## 連句会案内

。連句教室 会費千円

日時 第一日曜日 午後一時—五時  
会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ十一ノ三  
(電) 九四一—一一四五

。A・C・C連句実作講座

日時 第二・四水曜 午後一時—三時  
会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

新宿区西新宿二ノ六ノ一

(電) 三四四—一九四一(代表)

入会金 五千円

受講料 一万九千八百円(十回)

。猫叢会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)

会場 松声閣

文京区新江戸川公園内

(電) 九四一—九六四九

。柏連句会

日時 第三日曜日 午後一時—五時

会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地マ

1ヶット下車)

## 雁帛往来

▽『連句辞典』について各新聞も次のように紹介してくれた。

何人かが集い、一定のルールのもとに五・七・五音、七・七音を交互に付けて一巻の歌を詠み進む。共同制作により詩編を編むという世界的にもまれな詩形式、連歌の趣向に興味を持つ人の座右にあつて便利な本が出た。上・下句の実作例、鑑賞の手引きとなる解説が豊富。初心者への配慮を含んで親しみやすい。

(朝日新聞8・3)

本来、連句は口伝が中心で活字で伝えるという伝習が薄い。それゆえあえて編集されたという。初心者の実作に役立つよう配慮しつつ、鑑賞の手引きや研究資料を五十音順に配列してある。

(東京新聞8・5)

復権する座の文芸。連句の魅力連句は集団(II座)によって創作される異色の文学である。近世期庶民文学の代表であり、俳句はこの連句を母胎として発生した。近年、現代詩にその手法がとり入

れられるなど大いに注目されている。現代連句理解に必須の知識を解説。

(サンデー毎日8・10号)

連句とは、言うまでもなく、近世期庶民文学の代表であり、俳句はこの連句を母体として発生した。一人の内的世界を表現する西洋文芸の伝統とは違い、仲間(連衆)が集つて一つの作品を合作する文芸。座をなす者同士の激しい詩魂のぶつかりあう享受と創作の文芸とも言えよう。

(聖教新聞7・17)

季刊「連句」第十四号

定価 五百円

誌代 年二千円(送共)

発行 昭和六十一年九月一日

編集人 杉内 徒 司

発行人 東 明 雅

季刊「連句」発行所

〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二

電話 ○四七一(七五)一一九二

振替口座 東京七―五二二三三

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都豊島区高田一ノ六ノ二四  
電話 ○三(九八六)一七一―一五

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

B 6判

三五二頁  
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使え  
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を行った。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

## 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懷紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鷗沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円

## 俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円

## 現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとられず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円

## 季節辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円

## 難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B 5・国語学会編 B 5一〇〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大二編 A 5六〇〇円

国語慣用句辞典 白石大二編 B 6二〇〇円

国語史辞典 B 6三〇〇円

日本語源語辞典 堀井令以知編 B 6一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B 6一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼・寧編 B 6三〇〇円

近世上方語辞典 前田・勇編 A 5一五〇〇円

花柳風俗語辞典 藤井宗哲編 B 6三〇〇円

明治新語俗語辞典 樺島忠天他編 B 6三〇〇円

難訓辞典 中山泰昌編 B 6三〇〇円

名乗辞典 荒木良通編 B 6一八〇〇円

名数数詞辞典 森 睦彦編 B 6四〇〇円

あいさつ語辞典 奥山登朗編 B 6一八〇〇円

新版 ことば遊び辞典 鈴木兼三編 B 6五八〇〇円

類語辞典 鈴木・広田編 B 6一八〇〇円

類義語辞典 徳川・宮島編 B 6三〇〇円

表現類語辞典 藤原亨一他編 B 6四八〇〇円

新版 文章表現辞典 神島・村松編 B 6一九〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2